

「大衆的スピリチュアリティ」の現在

平野直子

はじめに

「スピリチュアル」という片仮名の形容詞を耳にされたことはあるだろうか。2003年来、マスメディア上で急速に流通しはじめたこの語は、「至福のスピリチュアル・リゾートへ！パワーと幸運を授かる世界の楽園」（『CREA』2006年1月号）というように、（特に女性誌における）占い、美容、健康、旅行、自己実現など幅広い企画のなかで登場している。また「スピリチュアル・カウンセラー」江原啓之の登場に伴い、地上波テレビでも市民権を得つつある。

「スピリチュアリティ (spirituality)」なら宗教関係者や研究者、医療・看護・教育など、広義の対人ケアの専門家にはなじみのある言葉だろう。「特定の宗教団体や宗派の教えを信じてはいないが、目に見えないものの存在や価値を尊重する」といった傾向が、近年このように呼ばれている。しかし、現在マスメディアに進出を続ける片仮名の「スピリチュアル」は、そうした文脈とは関わりが薄いようである。それは「目に見えないもの」の価値や存在を前提にしているという点では変わらないが、それが自己への探求や心身の健康維持、美容、開運といった話題と結びつき、上のような専門の領域の間だけでなく、広く一般に流通してきている。

このいわば大衆化した「スピリチュアル」というカタカナ語は、なぜこのように急速に普及し使われるようになったのだろうか。本稿では、まずこの「スピリチュアル」という片仮名の形容詞の現状とその来歴を報告し、その上でこの語が指し示している——2006年現在にはまだ形成途中にみえる——独自の領域、またそれが持ちうる意義について考察する。

1. 「スピリチュアル」という形容詞の世界

宗教情報リサーチセンター (RIRC)⁽¹⁾ のデータベースで、この語が見出しに含まれる新聞・雑誌記事を検索すると、80年代には0件、90年代はすべての年を通じて8件しかないものが、2000年には7件、2001年10件、2002年23件と少しずつ増え、2003年には73件と3倍になる。2004年にはいちど48件まで減るものの、2005年にはまた90件まで増え、今年（2006年）は6月までにすでに70件を数えている。「スピリチュアル」という形容詞が2000年来、特にここ3年ほどで普及した言葉であることがうかがえる。

こうした一般雑誌・新聞記事における片仮名の「スピリチュアル」の増加は、じつは「スピリチュアルカウンセラー」江原啓之^②のメディアへの露出増加とリンクしている。江原啓之は前世や守護霊などの「見えない世界」を「霊視」によって語る、いわゆる「霊能者」であり、それを人生相談などに応用し90年代から女性誌などに登場していた。そして2002年以来、肩書きを「スピリチュアル・カウンセラー」として、『婦人公論』の「スピリチュアル講座」をはじめ定期連載を持つようになる。そしてこれ以後、「スピリチュアル」の語を他の雑誌記事や書籍のタイトルに用いて活動していく。これが2003年を中心とした、雑誌・新聞記事における「スピリチュアル」という片仮名形容詞の増加に大きく貢献している。

江原の直接関連しない記事で「スピリチュアル」を名乗るものも、2002年の7件から2003年の43件といった大きく増え、2004年に15件と減り、2005年には36件とまた増えてくる。江原のメディア露出に連動して変化している様子がわかる。堀江宗正も指摘しているとおり^③、マスメディア上の「スピリチュアル」の語は、江原啓之の標榜する「スピリチュアル」と重なる形でイメージを形成されつつある言葉であると言える。

とはいえ、この「スピリチュアル」の語は江原啓之によって初めて使われたものではないし、現在でもマスメディアから視点を移せば、この語が江原啓之の影響下にのみあるものではないことがわかる。一例をあげれば、2002年に以来さかんに開催されるようになった「スピリチュアル」を冠したイベント群がある。

最も古くから、そして頻繁に行われているのが「スピリチュアル・コンベンション」(すぴこん)である。「癒しとスピリチュアルの大見本市」と銘打たれたこのイベントは、現在全国16都市で開催され、最も頻繁に開かれる「東京すぴこん」は2005年までにすでに20回を数える。また昨年から東京・有明で行われている「癒しフェスティバル」、大阪で行われている「癒しスタジアム」と、ここ数年類似のイベントが並び立つようになった。「癒しフェスティバル」はそのコンセプトに「Beauty+Health+Healing+Spiritual」を掲げ、「癒しスタジアム」はそこに「スピリチュアル」の名こそないものの、ほぼ同内容の出展内容ですでに5回を数えている。

これらのイベントでは、美容・健康・リラクゼーションを目的とした施術やグッズとともに、「リーディング」といわれるその人自身の状態を読み取るカウンセリング、占いなどのサービスを販売するブースが、多いものでは百以上出展される。これら多様な内容は、「オーラ写真」の人気などに江原啓之の影響を見ることはできるだろうが(彼は相談者の身体から発する「オーラ」を「リーディング」してアドバイスの根拠とする)、その世界観でこの多様な対象がまとめあげられているとはいえない。例えば一つのイベントを包括するのに頻繁に使われるのは、むしろ「癒し」というキーワードや、現代日本の生活がストレスやリスクに満ちており(特に女性たちが)脅かされ消耗しているという共通理解、それに対応する「癒し」というキーワードである。江原啓之の著作や番組がマスメディアにあふれていることは、むしろこうした流れの一端と言っ

たほうがよいだろう。

「スピリチュアル」という語を意識的に使用する人々の、この語についての認識はどうだろうか。その一つの例として、『不思議サロンの凄い実力』（2004年発行）⁴⁾ という書籍の前書きを引用してみよう。この本は、「すぴこん」等の癒しイベントと同様女性の「健康・美容・自分探し」と「スピリチュアル」（その内容が何であるかはここではおくとして）のつながりを積極的に取り上げ、季刊で発行されている『TRINITY』という雑誌から派生したムックである。

「不思議サロン」っていったいナニ？

本書のタイトルを見て、そう思った人は多いと思います。

カンタンに言ってしまうと「ヒーリングサロン」のこと。

あなたの心と身体を癒し、キレイに、幸せにしてくれるところです。

アーユルヴェーダ、オーラソーマ、ヒプノセラピー、ミスティカ、レイキ……。

言葉や理論では説明しにくい……でも、人が持つ本来の力を最大限に目覚めさせて、心も身体もリフレッシュ&リセットしてくれる不思議サロン。

そんな素晴らしい場所が世の中にはたくさんあるのです。

そして、その多くは「スピリチュアル」と呼ばれるところ。

あっ、ちょっと待って！！ 怪しい本ではないので閉じないでください。

……なんて、前置きも、数年前までなら必要でしたが、今や「スピリチュアル」という言葉も「癒し」と同様、雑誌やテレビでも紹介され、気がつけばブーム……いや、それを通り越して一般化されつつあります。

「スピリチュアル」という言葉が、注釈や弁解なしで使われることができるようになったこの本ではいわれる。そこからは逆に、二つのことが読み取れる。一つはこの本出版の数年前なら、「スピリチュアル」という語が即座にある種の「怪しさ」のしるしと見なされかねなかったということ、もう一つは「時代は変わった、今や「スピリチュアル」は一般化した」という認識である。この本は2005年に第二号を発刊しているが、そのときには「噂のヒーリングサロンを体験紹介——クリスタルや花、スピリチュアルな癒しでキレイはもちろん、幸運体質も手に入れる」と、帯にも「スピリチュアル」の語が入れられ、前書きにはこの語を使うことについての特別な注釈・弁解はなくなっている。

「スピリチュアル」は2004年前後に一般化したというこの証言や、冒頭に紹介した記事タイトルにおける「スピリチュアル」の2003年からの登場数増加を見れば、2003年から200年代半ばにかけて、この語がにわかに耳目に入りやすいものとなったという現象は、実際に起こっていたといえるだろう。

ただここで注目すべきは、「誰に」対する「一般化」だったのだろうかということだ。そこにこの語を追っていく意義が見えてくる。というのは、実は片仮名で表記される「スピリチュアル」という言葉の使用例のことだけを言えば、それは特に新しいものではないからだ。

2. 「スピリチュアリティ」という語の受容史と現状

先ほどから使用している RIRC 資料においても、「スピリチュアル」をタイトルに冠した雑誌・新聞記事は、1990年代から（十年間で8件とはいえ）存在してはいる。しかしその文脈はかなり異なる。例えば「全人的ケアを目指して「スピリチュアルケア」をテーマに臨床パストラルケア教育センター全国大会開催」（『カトリック新聞』1999年11月21日）、「EPO、沖縄で加納昌吉とスピリチュアル・セッション……私たちの夢は神と共棲する音楽の復活！……」（『宝島』1993年6月24日）といったものである。

2003年より前の日本において、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語が使われることの意味については、葛西健太が次のようにまとめている。

英語の spirituality の語の構造を考えれば、spirit+uality すなわち「靈性」と訳すのが一番近そうだ。だが、「靈」という日本語には、英語なら ghost と表現するような「幽霊」「悪霊」「亡霊」等、死者の魂のおどろおどろしさが含まれている。「たましい」「こころ」「精神」を意味する「霊肉」「万物の霊長」などの用法、人間の認識や知識を超えているゆえに実態としてはとらえられないが、たしかに何か神秘的なものがあることを含意する「靈感」「靈験」「靈気」等の表現もある。……音楽や美術の思想性を指示するには、「精神性」の訳語の方がぴったりくる。「靈」に含まれるおどろおどろしさなどを喚起しなくても済むためであり、世俗にも浸透しうるだけの高尚さや深みに焦点が当てられている。ここで一つの用法が明らかになる。「宗教」ではなく「スピリチュアリティ」の語を用いるのは、宗教的な非日常性に言及しつつも宗教からほどよく距離をとってくれると期待しているためだ⁽⁵⁾。

つまり「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」という言葉には、「なにか不思議なもの」の存在や「精神性」など形が見えないものの価値を、「日本語の〈靈〉がもつおどろおどろしさ」を除いて、かつ「世俗」(=「この世」)の文脈を降りないまま語れるという点で、有用だったということだ。

目に見えないものや、その存在について客観的な根拠を共有できないものを、「存在する」もしくは「価値がある」ものとして語ることは、現代日本社会の「世俗」の立場からすれば、(葛西の言葉を借りると)「非日常」的なことだ。それは無前提(もしくは何らかの弁明なしに)に認められることではない。

こうした中で、あえて「何か神秘的なもの」について語るためには、「宗教」という専門の領域が準備されている。そこは、「何か神秘的なものがある」こと、根拠を示すことのできない事柄について話すことに特化した領域である。しかし同時にそこには特定の宗教の教義や組織とのかかわりが避けられないし、サービスの売買や治療行為など、それを具体的な（「世俗」でも供給できるような）効果へと結びつけることには厳しい目が向けられる⁶⁹。

「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語を使うことには、一つにはそうした特定の組織・教義へのコミットメントを避け、さまざまな宗教・宗派、あるいはそうした「制度」の中になくものを、包括的に語るができるという利点がある。またもう一つの利点は、日常／世俗から降りずに、なおかつ「見えないもの」やその価値の存在について語るができることだ。

このような「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語の利点を、主に必要としていたのは誰だったのだろうか。伊藤雅之はこの「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語が、「1980年以降、欧米諸国において……多く用いられるようになってきた」と述べる。そして日本でも、「大型書店の精神世界／ニューエイジのコーナーに行くと、タイトルに「スピリチュアル」の語を使用した書籍を多く見かけるようになった。……また、医療や教育などの現場では欧米と同様に、いのちや魂や見えない何かとのつながりを強調するスピリチュリティ文化は浸透しつつあるように思える」と述べる⁷⁰。

日本においてこの言葉が使われたのは、まず第一にキリスト教の文脈の中であり、「聖霊」「神」とのつながりの体験についてであった。そのほかに上の伊藤の見解や、RIRC データベースにおける1990年代の例から、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」を実践的な関心から⁶⁹使う人々には、「医療・教育」などの現場で「いのちや魂や見えない何かとのつながり」について語ろうとする人々⁷⁰、「精神世界／ニューエイジ」の実践者たち、の二つの流れがあったことがわかる⁷⁰。

伊藤は先の発言に続け、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語の「日本人一般への認知度はあまり高くなく、日常生活においてこれらの語を使用する人びともかなり限られている」（傍点筆者）と言う。しかし先ほどから述べているように、伊藤の上の発言がされたちょうどその頃である2003年を境に、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語が「一般化」、つまり共通の環境や背景を持たない人々に向けて発信されたり、流通したりしていく。

伊藤の後に「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の語られる文脈を整理した堀江宗正（2005）や安藤泰至（2006）は、2000年代半ばに向けて顕著になっていく、江原啓之に代表されるようなこの潮流を、「スピリチュアリティ」の一つの特徴的な領域と位置づけている。しかしその内容については詳しい言及はなされていない。ではこのいわば「大衆化」した「スピリチュアル」は、内容的にそれまでの「スピリチュアル」と何か異なるのだろうか。

3. 「大衆化」した「スピリチュアリティ」——私事化したニューエイジ?

一章で確認したように、2003年ごろから表面化してきた「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の新しい流れは、美容・健康・リラクゼーションを目的とした施術やグッズ、「リーディング」といわれるその人自身の状態を読み取るカウンセリングなどに代表される。しかしこれらはただの「美容サロン」「健康食品/機器」「カウンセリング」ではなく、「スピリチュアル」なものに関わってくるという。

この新しい「スピリチュアル」という語——ここでは「大衆化したスピリチュアリティ」と呼ぶ——の実践者の自己認識の例として、第一章で『不思議サロンの凄い実力』の前書きをあげた。そこでは「スピリチュアル」と呼ばれるのは、「言葉や理論では説明しにくい……でも、人が持つ本来の力を最大限に目覚めさせて、心も身体もリフレッシュ&リセットしてくれる」ところであるとされている。

「言葉や理論では説明しにくい」ものに価値を見だしつつ、それを「世俗」の文脈を降りないまま（つまり市場におけるサービスの売り/買いとして）扱う——これは、第二章で見たそれ以前の「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」の傾向（「何か不思議なもの」の存在や「精神性」など形が見えないものを、「日本語の〈霊〉がもつおどろおどろしさ」を除いて語る）と同じであり、「スピリチュアル」「スピリチュアリティ」という語の最大公約数的な部分と言えよう。この「大衆化したスピリチュアリティ」と、それ以前の「スピリチュアリティ」との連続性は他にも見いだせる。とくに「ニューエイジ/精神世界」とは、ほとんどその名が変わっただけではないかというほど内容的に似かよっている。

ニューエイジについて知りたければ、どこでもいいからニューエイジ専門の書店に行ってみればいい。店内にはかすかに香やオイルのかおりが漂い、つつましやかな話し声が聞こえ、浜辺に打ち寄せるさざなみの音かチベットの読経がBGMとして流れているだろう。

掲示板は、カルマの講座から神聖舞踊のクラス、タロット占い、瞑想の会、休日のピラミッド体験など様々な催しの情報でいっぱいだ。二つほど置いてある小卓のうちの一つには水晶かケルト風の宝石が展示してあり、……奇跡の治癒を約束する「自己治療」本の多彩さに、うめき声をあげている書棚もあるくらいだ⁽¹⁾。

ここで描写されるニューエイジの典型的アイテム——「癒し」効果のある香り、音、グッズ（パワーストーンなど）、各種セミナーの案内など——は、現在「すぴこん」や「癒しフェア」などでもほとんど同じように見ることができる。

しかしそこには、「ニューエイジ/精神世界」という名に暗に含まれている、「高次の精神を持つ

た新しい時代の到来」という大きな物語の存在が希薄である。もとから日本の「ニューエイジ／精神世界」が、オルタナティブな価値観を求める運動というよりは、消費の一つのスタイルに近いものであることは、弓山達也などが指摘していた⁽¹²⁾。ただ大衆化した「スピリチュアル」には、もはや「時代」「世界」といった大きなヴィジョンはすっかり陰を潜め、個人の「心と身体を癒し、キレイに、幸せに」することに注目する。

「ニューエイジ／精神世界」のアイテムを継承しながら、いわば「大きな物語」——個人が自らの位置や行為を、一つの「歴史」の流れに位置づけられるような文脈——を失っているという大衆化した「スピリチュアル」の傾向は、たとえば Massimo Intovigne が報告する、イタリアにおける「ネクストエイジ」に近いように思われる。イタリアではニューエイジ運動が「〈より高次の精神に導かれた、新しい時代の到来〉という予言が成就できない」ことによって危機を迎えていく一方、コマーシャルイズムを否定せず、むしろそれを積極的に利用して自己啓発的なセミナーや書物を生産する流れが起きており、この傾向が「ネクストエイジ」と呼ばれているという。Intovigne はこの「ネクストエイジ」を「私事化したニューエイジ」とであると述べる。

これらの例が示すことは、進歩的な至福千年説的なユートピアが失敗した時、個人的な生活に限定された私的ユートピアが私事化のプロセスを通して発展するだろうことである⁽¹³⁾。

2003年以來の「大衆化したスピリチュアリティ」も、「ニューエイジ／精神世界」が掲げていたユートピアが失墜したことによって生まれた、「私事化したニューエイジ」なのだろうか。すると大きな物語を失ったあと（あるいは最初から持たなかったとしても）、「スピリチュアル」という別のラベルをもってしてまで、ニューエイジ的なグッズやサービスを流通させているのはいったい何なのだろうか。

4. 「自己についての大きな物語」をめぐって

「大衆化」した「スピリチュアル」の世界で、美容／健康に関わる施術やグッズとならび、非常に隆盛なのが各種「リーディング」の技法である。「リーディング」とは、クライアントの「本当の姿」——現在の心身の状態から潜在的な性質、ときには前世から続く自分の「たましい」の履歴やこの世での役割まで——を、あるときは天使の言葉を示すカードを繰り、あるときはクライアントの「オーラ」「チャクラ」（身体から発されている色やエネルギー）から読み取ることである。「オーラソーマ」「カラーセラピー」というジャンルになれば、クライアントの選んだいくつもの色から、その人の現状や「本当の姿」を読み取る。またそれに基づいて、これからの生活の指針を与える。

マスメディア上でのブームを支える江原啓之も、これと同じパフォーマンスを行う。各人が放

出するという「オーラ」の様子から、クライアントがどんな性質を持っているのかを読み取り、また「霊視」によってクライアントに憑いているという「霊」（守護霊・指導霊などがある）を見、その影響を語る。また、クライアントが直面する問題や、周囲の人々との関係を、過去世から連綿と続く因縁話の中に配置し、提示する。

日常生活で疲弊し、本来の働きを失った身体を整えるという身体に対する「癒し」に対し、これらの「リーディング」を用いたサービスは、クライアントに彼（女）自身が見失っている「本来の自己」を回復させる心の「癒し」ということになる。そして多くの「スピリチュアル」の供給者は、心・身の状態は切り離すことができない統一的なものだと考えるため、心・身体両面から「癒し」を行う。「大衆化したスピリチュアル」は、このようにして「美容／健康＋スピリチュアル」という空間となる。

「リーディング」施術者による「本来の自己」の提示は、「人工的・契約的な空間において、カウンセラーや悩みを共有する仲間などとの、言語的・非言語的コミュニケーションを通じて、自己の向上や成長を目指す営み」という面において、「セラピー・カウンセリング文化」⁽¹⁴⁾の一翼と見なすこともできよう。ただし「セラピー文化」を「心理学的知識の一般化」という点のみを重視して考えるなら、「リーディング」のセッション内で行われていることは捉えきれなくなる。

ここでは、クライアントが持つさまざまな悩みや問題、時には死者との付き合い方までが、「たましい」の在り方、特に過去世からのつながりの中で説明され、アドバイスが与えられる。それは現代における「苦難の神義論」とも言い得るものである（2006年4月に出た江原啓之の著作が『苦難の乗り越え方』であるのは象徴的である）。

「スピリチュアル」の受け手たちは、現代日本という「後期近代」的様相を呈する社会で、自分の統制の及ばない、全体像のつかめない外部環境の中にある⁽¹⁵⁾。そのなかで彼らに対し、「リーディング」の各種技法は「彼（彼女）が何となく苦しいのはなぜか」「なぜそのような状況に陥るのか」の一貫した物語を提供する。そのときに使われる言葉は、もはや「世俗」のものだけではあきたらない。「天使」や守護霊の存在、過去世からの縁などあらゆる「超越点」から、クライアントのアイデンティティや彼らに起こっていることを、全体的に語りなおすのである。そういった意味で、「リーディング」のセッションが行っているのは、「セラピー・カウンセリング」でありながら、一種の「託宣」でもあるのだ。ここには「宗教」という言葉は一言も出てこず、一見すると「セラピーの売り／買い」という世俗の文脈の中だけにあるようだが、起こっているのは「宗教」的な営為といえよう。

「ニューエイジ／精神世界」の特徴もしばしば「自己」を神聖化し掘り下げていくところに見いだされているが、それは世界の^レ変^レ革^レにまつわる物語につながっていた。一方、こうした「リーディング」セッションで与えられるのは、そのような世界についての「大きな物語」ではない。

どちらかといえば「ネクストエイジ」のように、「私的なユートピア」を目指すためのものと言えるだろう。ただ Intovigne が提示する「ネクストエイジ」が、「ニューエイジ／精神世界」の遺産である心身の技法を自己啓発・自己実現という積極的な面に使っているのに対し、「大衆的スピリチュアリティ」は不安定で傷つきやすい個人が現代社会をサバイバルしていくための、個人についての「大きな物語」を供給するのである。

おわりに——サバイバル・ツールとしての「スピリチュアル」

では結局、上のような営為と「スピリチュアル」という言葉の関係は何だったのだろうか。それはおそらく、「俗世」のプレイヤーの地位を降りること——宗教団体に加盟したり、何か一つだけ教義にコミットしたり——の諸々のコストを避けながら、「俗世」を超えることを話そうとする人々が、自分たちの行為を名指しするために手に入れた、格好のラベルであったのではないか。彼らは「消費者」という位置を利用し、宗教的な需要を「心理学化」「セラピー文化」のなかにしたたかにしのびこませる。「スピリチュアル」なるものを追っていくことは、「自己アイデンティティの再帰的構成」に強迫的に追われる、不安的な現代社会の生をやりすごしていくための、一つのサバイバルの実践を見ることなのである。

注

- (1) 宗教情報リサーチセンター (RIRC; <http://www.rirc.or.jp/>) は新聞・雑誌上の宗教に関する記事を収集保存しており、全国紙・地方紙約90点、雑誌48点、他専門誌など幅広く対象としている。すべての媒体を網羅しているとはいえないが、このデータベースの収蔵数は一つの参考とすることができよう。
- (2) 江原の著述活動は1995年にはすでに始まっているが(『自分のための「霊学」のすすめ』ハート出版)、90年代にはまだ「心霊」「霊」という言葉を使っていた。書籍タイトルに「スピリチュアル」の語を使い始めたのは2001年の『幸運を引き寄せるスピリチュアル・ブック』であり、これは現在70万部を突破しているという。03年にはテレビ東京の『えぐら開運堂』でテレビのレギュラー番組を持つようになり、その翌年にはフジテレビで『江原啓之スピリチュアルスペシャル 天国からの手紙～亡き家族からのメッセージ』で大きな反響を得た。05年からテレビ朝日系列の『オーラの泉』に出演、当初は30分番組であったがその後1時間に枠を拡大、夜11時15分からという時間帯としては異例の視聴率(13%前後といわれる)を稼ぎ出している。
- (3) 堀江宗正、「1995年以後の日本におけるスピリチュアリティ言説」、「宗教と社会」学会スピリチュアリティ研究部会2005年12月例会報告。
- (4) 『不思議サロンの凄い実力』、エルアウラ2004年。
『不思議サロンの凄い実力 vol.2』、エルアウラ2005年。
- (5) 葛西賢太、2003、「スピリチュアリティ」を使う人々——普及の試みと標準化の試みをめぐって』、『スピリチュアリティの現在』、人文書院、pp.123-159。
- (6) 日本が「近代国家」として(自国民に)認識されていく過程で、「宗教」は「世俗」を超えるものを囲い込む領域として措定されていく。このとき、「宗教」がそれ以外の領域にカバーされるべき活動(経済行為や医療行為)に手をつけ、具体的な効果をあげるとき、それは「現世利益的」と呼ばれ、非難を受けやすい(平野直子、2006、「新聞・雑誌記事における〈新宗教〉言説の発生と展開」、『社会学年報』47、pp.85-99、を参照)。

- (7) 伊藤雅之、2005、「スピリチュアリティ研究の射程と応用可能性——生老病死におけるスピリチュアル体験に着目して——」、『年報社会科学基礎論研究』第4号、p.40。
- (8) 安藤泰至は「スピリチュアリティ」の語を使う人々を分類し、「広義のヒューマンケアに関係する専門職の人々」と「ニューエイジ・新霊性運動の当事者たち」といった実践的関心を持つ人々を上げ、もう一つのカテゴリとして「宗教学者たち」を上げている（安藤、2006、「スピリチュアリティ」を語る文脈、「宗教と社会」学会第14回学術大会一般報告）。つまり、上のような現象を観察・記述しそれを改めて「スピリチュアリティ」として語りなおす、特に宗教学上の議論の存在を指摘するのである。本稿もこの三番目のカテゴリに入るものであり、ここでは主に実践的関心によりこの語を使う人々の層が変化しているということに注目している。
- なお「スピリチュアリティ」についての宗教社会学上の議論は、Beckford (1984, 1985) や Heelas (1992, 1993) のニューエイジ運動やヒーリング実践について研究との連続性の上で語られている。これらは世俗化論による宗教の衰退という想定に対して、現代における「宗教性」の所在を指摘しており、島藺 (1996) はこれを先進国における世界的動向と見た上で、運動・実践の日本における現われを、「新霊性運動」という言葉で表現した。本稿ではこれらの議論とはまた別に、片仮名語として日本に定着しつつある「スピリチュアリティ」という形容詞を扱っている。
- (9) 医療・看護の現場では、1970年代ごろからがん告知や「終末期の医療」の問題が認知されるようになり、1980年後半からは脳死・臓器移植の問題が表面化するなど、「死をどう受け止めるか」「生きること／くいのち」とは何かといった、物理的身体への治療では対処できない事態と向き合っている。こうした「生きる意味」「生命の質」への着目する際、特定の宗教によらずにこの視点を扱うにあたって、この語は用いられるという傾向にあるようだ（薄井篤子、2002、「スピリチュアル・ケアと宗教」、『現代宗教』2002年号、pp.205-227）。
- (10) ニューエイジは1960年代、欧米の若者の中で広まった対抗文化の中で、人間に内在する「スピリチュアル」なものを重視し、「意識変容が社会変革に通じる」と主張する人々をその源流に持つとされる。これが日本社会に導入され、「精神世界」と呼ばれるジャンルに影響を与えたと伊藤は指摘する。またその特徴について、①自己の内面的探求に重点を置く、②固定的な組織に拘束されない、ネットワーク的な人間関係、③担い手は「宗教」という言葉には違和感を示すものの、「スピリチュアリティ」には興味がある——この三つをあげている（伊藤雅之、「現代のスピリチュアリティ文化」、『現代社会とスピリチュアリティ』溪水社、2004年、pp.3-21）。
- (11) レイチェル・ストーム（高橋巖・小杉英了訳）、『ニューエイジの歴史と現在 地上の楽園を求めて』角川書店、1993年、p.15 (Storm, R., 1991, *In Search of Heaven on Earth*, Bloomsbury Publishing.)。
- (12) 芳賀学・弓山達也、1994、『祈る ふれあう 感じる——自分探しのオデッセー』、IPC。
- (13) Introvigne, M., "After the New age: Is There a Next Age?," *New Age Religion and Globalization*, Aarhus University Press, pp58-69.
- (14) 小池靖、2002、「文化としてのアダルトチルドレン・アディクション・共依存」、田邊信太郎・島藺進編、『つながりの中の癒し』専修大学出版局。
- (15) Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (松尾精文・小幡正敏訳、『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』而立書房、2003年)。